울산대학교 인문논총 제20집 pp.185~210, 2001.

感謝・謝罪表現の語用論的分析
-その間接発話行為を中心に-

김동완
일본어・일본학과

1. はじめに

日常の言語生活に於て、他人から恩恵を蒙ったり好意を受けたりしたときに正常な人間関係では普段感謝の念を表出することになる。そういった場合、発話されるのは大体次のような慣用的感謝の表現が一般的であろう。

ありがとう。
どうもありがとう。
(どうも)ありがとうございます。
(どうも)ありがとうございました。
どうも。

尚、場合によっては次の、もともと謝罪の表現[1)]であろうものが使われることも決して稀ではない。

1) 本稿で言う謝罪とはより広い意味で使いたい。普通、謝罪とは他人への過ちや迷惑に対して詫びることをさすが、場合によっては他人に何か困ったことをお願いするとか、弁明がましいことを言う表現も引っくるめて一応謝罪の表現として含めることにしている。文字面では多少語感の強過ぎるところもないわけではなかろうが、感謝のさす漢語の感じとペアを造ることがその単なる狙いである。要するに、他人に不愉快或は不満足を感じさせたりもたらしたりしたすべての行為に対してお詫びすることにもともとの発話意図が潜んでいると認められる一切の表現をさすことにしたい。

すみません。
すいません。
どうもすみません。

一方、謝罪の慣用的表現としては大体次のような挨拶語が一般的に使われる。

すまない(ね)。
すいません。
すみません。
どうもすいません。
どうもすいませんでした。
ごめんなさい(ね)。
ごめん(ね)。
申し訳ありません。
(どうも)申し訳ございません。

要するに、このような感謝、謝罪の表現は発話者と聴者間の位相とその対象条件2)、それからそれを取り囲んでいる状況などにより選別的に表されることになり、それが定型的、慣用的な表現として落ち着いていると思われる。しかし、実際の言語生活の場ではこのような定型、慣用表現から逸脱した、それこそバラエティーに富んだ様々な表現が取り交わされること我々が普段経験しているところである。例えば、次の表現はその形式だけに拘る限り一応感謝の表現としてはなんだか物足りないが、機能としては立派な感謝表現になっていると思われる。

2) 対象条件というのは感謝、謝罪表現を表出する発話時の以前に発生した、両表現が指向する内容をさすことにする。言い換えれば、発話者が聴者から恩恵を蒙ったとか、逆に迷惑をかけた結果についての発話者の心理的把握ともなるのである。この心理的把握に基づいて、発話者は多様な感謝、謝罪表現の中からその度合いに照らし適当な表現を選びだすことになると思われる。

(1) 客 じゃ、これで。
　主 どうも、わざわざおいでいただいて。
　客 いえ、お時間をとっちゃいまして。　(Aural comprehension)
(2) 桑太郎 そう。はいはい。いやいや。ここはいい。ここはあたしにね、まかせておきなさい。
　愛子 じゃ、ごちそうんなります。　(わが麗しの友)

例文(1)は文面の上では聴者の訪問のことだけに焦点があてられている。勿論、お客の訪問により発話者がなんらかの形で恩恵を蒙ったという暗示が補助動詞「いただく」をもって表されてはいるものの、形式上は全く感謝の念が反映されていない。含蓄性豊かな日本語の特性が充分分かる日本語話者なら、その次に感謝の念の反映されている形式が後続するはずだったのがたまたま省略されたのであろうということをすぐ予測できるであろう。それではなぜ日常の言語生活の場では

このような後続形式を省いたりするのであろうか。これは恐らく表現効果の上昇を目掛ける、即ち、後続形式を省くことによりくどさを避ける一方感謝の対象条件にだけ焦点をあて、意味の拡張を狙ったものと考えられる。つまり、発話者が聴者の行為(ここではわざわざ訪ねてきたこと)だけを指摘することによりその行為が発話者にとっていかに大事でありがたいかを一直線に表明しているのである。

例文(2)の場合は文面上は単なる通知の統語形式になっているものの、その発話機能としては感謝の意味合いを果たしている。聴者の驕りに対してなんとか感謝の礼を表さなければならないが、直接的な表現にしてしまうと厚かましい印象を与えることになるかも知れない、或は、前もって期待していたかのような印象になるかも知れない、それでとにかくここではしかたなく驕られることにするが、次回はこの驕りを報いたいという発話者の気持が含まれているわけであろう。いづれにせよ、このような別の統語形式に感謝の発話機能が潜むことにより高い表現効果を醸し出すことになると言えよう。

これと同じことは謝罪表現にも当てはめることができる。

(3) 律子 一人で行ける。かっこ悪かったらあたし、一緒に行ってあげるわよ。
　小倉 子供じゃあるまいし、一人で行けるよ。それより、いい記事書けよ、いい記事。さっきは、ちょっと失礼なことを言ったなあ。　(ちょっといい夫婦)

(4) 林　疲れたでしょう、律子さん。無理に引っ張り出して。
律子　いえ……　(エイジアン・ブルー)

例文(3)は謝罪の表現成立の拠り所が発話者にあるということを、自責の念を混ぜて表出している。いわゆる判断叙述の統語形式である。ところが、その発話機能としては完全な謝罪になっていると思われる。つまり、発話者のいけないところを自ら指摘することにより聴者への謝罪の念を迂回的に表明しているわけである。こういう場合単刀直入に謝っていては軽はずみな謝罪へと転落してしまうかも知れない。やはり謝罪の根拠を発話者の方に置くことにより重きのある謝罪表現になろうかと思われる。

同じことは例文(4)にも言える。例文(4)では、聴者を無理に引っ張り出したという働き掛けの責任が発話者にあると言うことを素直に認めるといった謝罪表現である。即ち、根拠の提示が深い謝罪へと繋っているわけである。

以上、感謝、謝罪の念が直接文面上の統語形式に反映されている直接発話行為ではなく、あくまでも別の統語形式をもってより深くて高い感謝、謝罪の念を表していると思われる間接発話行為についていくつかの例を挙げながら考えてみた。要するに、単なる感謝、謝罪表現といってもそこにはいろいろと多様な統語形式が存在しており、それが発話者と聴者間の位相、対象条件の度合い、それから心理的、物理的な周辺状況と絡んで表出されたりするわけである。複雑で多様な言語生活の一端が窺われるところである。

本稿では、統語形式は感謝、謝罪の形式にはなっていないか、なるには物足りないようなものが実際の発話機能としては立派な感謝、謝罪へと機能していると思われる表現文をその分析の対象としたい。つまり、間接発話行為に重きを置き、それが実際の言語生活ではどのような発話者の心理的把握に基づいてどのような形式で表出されているのかを調べようと思う。尚、それがどんな表現効果を持つことになり、どういった条件で表されるのかをも分析しようと思う。それから、そのような統語形式には文構造の面でどういう仕組みと特徴を持っているかも合わせて考えてみたい。勿論、最初に指摘した定型的で慣用的な感謝、謝罪表現は本稿では一切分析の対象としない。本稿の関心はあくまでも感謝、謝罪の統語形式を全く使っていないながら見事にその念を表出できる形式だけにその分析対象を絞りたいと思うのである。

1-1. 分析の範囲

普段の言語生活で取り交わされている表現文は数えきれないくらい複雑で多様な様相を露呈しているのである。何かを勧める時の勧誘表現や他人への行動要求を表す命令表現(逆に否定の行動要求なら禁止表現になる)、それから欲求を表す希望表現をはじめ推量、比況、判断叙述に至るまで実に多彩な表現文が営まれている。その中で間接発話行為としての感謝、謝罪表現にだけ分析の範囲を絞ったことは次のような理由からである。

まず、感謝、謝罪表現は人間関係の潤滑油のようなものであるという認識によってである。世の中は決して一人だけで生きられる社会的システムにはなっていない。つまり、どういう関係であれ、いつも他人との人間関係の中で生活が保たれるようになる訳である。その関係には、親近、疎遠などの人情関係や年齢、身分、立場などの位相関係などがあり、その過程において思いやり、愛情、親しみ、過ち、違反、非難などの情意のやり取りや葛藤が生じるのが一般的である。このような人間関係に於て他人から利益を受けた場合は感謝表現を、他人に不利益を与えた場合は謝罪表現を表出することになる。

つまり、対象条件に合わせ適当な感謝、謝罪表現を表出することにより偏りがなく適切な人間関係が保たれるわけであり、もしこのような過程を省くとか度合いを緩めることがあったらその人間関係にはひびが入ることになるかも知れないのである。この意味で感謝、謝罪表現の重要性は言及するに及ばない。この感謝、謝罪表現を除く他の表現はほとんどが人間の行動や判断を要求することをその発話の根本的な発話意図としていると思われる。例えば、命令や禁止、勧誘、希望などは発話者や聴者の利益を予想しての行動要求文であり、推量や判断叙述、そして比況などは発話者の情意を表出することにより聴者の判断や態度などを誘導することをその発話意図としていると言えよう。

勿論、このような様々の表現文のやりとりの過程で(発話によらず行動による場合も多いことは間違いないことであるが)感謝、謝罪の対象条件が発生することになるのであり、この対象条件をうまく削除するとか挽回することのできるのが他ならぬこの

感謝、謝罪表現ではないかと思われる。本稿で感謝、謝罪表現をそのテ-マとしたのはこの両表現が円滿な人間関係を保つに於ての大事な潤滑油であるという認識からである。

もう一つは、感謝、謝罪表現の中でも間接発話行為だけに分析の範囲を絞ったことについてであるが、それは次の理由からである。

感謝、謝罪表現と言っても定型な統語形式を整っている表現文は言うまでもなく見た目で発話意図がすぐ分かり、その意味では発話の方向が直線的であると言える。即ち、後程ふれるであろうが、直接発話行為になるわけである。ところが、現代の複雑、多様な言語生活ではいつもこういう形式だけを持って感謝、謝罪が行われるとは決して言えない。それは、発話者と聴者の位相、両者の置かれている周囲の状況、対象条件の度合いなどが複雑に絡んでおり、それが時には間接発話行為を促すことが多いからであろう。こういうときは感謝、謝罪の拠り所となるところだけを提示することにより対象条件についての発話者の心理的把握の度合いを露呈するとか、言いさしを持って充分発話者の情意を表し、後は聴者の判断に任せるとか、或は聴者を単に呼びかけるとかしてより丁寧で深みのある感謝、謝罪の念を表せると思う。例えば、謝罪表現だけを例にとるといきなり他人のところを訪問して「突然伺いまして」というとか、遅く帰宅した亭主が自分の家内に「ハア-遅くなりました」という場合だっていくらでもあるわけであろう。それから、過ちを犯し担任の先生に呼ばれた生徒が先生の前で「先生.....」と呼びかける場合もそうであろう。このような謝罪表現はすべて定型の謝罪表現だけではあまりにも直線的、事務的な印象が持たれ軽はずみな表現になるかも知れないという心理的把握や認識から出てくると思われる。勿論、こういうことは感謝表現にも当てはまることになろうが、要するに、複雑、多様な人間関係の中で間接発話行為が頻繁に使われていることはとても興味深いことである。以上の理由から本稿では間接発話行為としての感謝、謝罪表現を分析の範囲とした訳であるが、できる限りどのくらいの間接発話行為が実際の言語生活で使われており、それに伴う表現効果と心理的把握はどういうものであるかを明らかにする一方、その統語形式の下位分類を目指したいと思う。

1-2. 分析の資料とその方法

本稿では映画の台詞をその分析の資料としている。それは、様々な場面に於て込み入った人間の情意や行為を観察するには一定の筋に則ってそれらしい場面を秩序を保ちながら設定している映画の台詞が一番適当であろうと言う期待からである。勿論、よりリアルな場面や雰囲気の獲得には実際の談話を録音しそれを分析するのがよかろうが、それは現実的になかなか難しい。というのは、人為的な場面の設定でない限り本稿のテーマである感謝、謝罪の場面をいちいち実際的な場面から探し出すことはあまりにも膨大すぎることであるし、尚、結構時間のかかる作業になる恐れがあるからである。そういったところからやはり映画の台詞に頼るしかない訳であるが、もともと映画というのはあくまでも人間の話であろうからそこにはより自然でリアルな情意や行為がいつも付きまとっていること間違いないことであろう。

ところが、映画の台詞に乗っている感謝、謝罪表現といっても直接発話行為の場合は相当その表出が出て来ており、それを類型化することまたそんなに困難な作業ではないが、統語形式に感謝、謝罪の標識がまったく反映されていない間接発話行為の場合はなかなかその例を探し出すことが簡単ではない。こういう場合は、とにかくより多くの台詞を漁ってみるしかないのは当然のことで本稿ではできるだけたくさんの台詞からその例を見つけ出そうと一応は努力したつもりである。

一方、集まった資料の分析方法であるが、まず形式から感謝、謝罪の対象条件--つまり、なぜ感謝をするのか、なぜ謝罪をするのかについての内容--を抽出したあと、次に感謝、謝罪をする過程での発話者の情意や態度--本稿では感謝辞、謝罪辞と呼ぶことにしているが--の類型化を試みようと思う。例えば、ある人が忙しい中をわざわざ発話者のだらだらとした話を最後まで聞いてくれ、それに対して「優子さん、熱心に聞いて下すって。」といったなら、これは立派な感謝表現になれるが、この場合、「優子さん(が)熱心に(自分の話を)聞く」ことが感謝の対象条件になる訳で、この過程を通じて発話者は恩恵を蒙ったと感じ、「(対象条件)て下すって」という感謝辞を表出しているのである。詳しくは節を改めて論じるであろうが、要するにこの感謝辞が他ならぬ対象条件に対する評価であり,心理的把握でもあると思われる。勿

論、このような発想を持ってすべての感謝、謝罪表現をはっきりと分析できるわけではなかろうが、一応、新しい試みとしての値打ちは充分あるのではないかと思われる。 さて、この感謝辞、謝罪辞の類型化であるが、これはどういう視覚を持ってこれらの辞を表出するかの問題にも繋るであろう。例えば、「いろいろとご面倒をおかけしました」という謝罪表現の場合は、発話者が聴者に面倒をかけたことをありのまま叙述することにより自責の念を持ってお詫びしている訳であるが、「せっかく来ていただいたのに」の場合は、聴者の訪問の結果に対する評価(ここでは当然のことながらマイナス評価)、つまり充分おもてなしができなかったとか、発話者がその時にいなかったとか、などの残念の念を持ってお詫びしている訳である。こういう分け方や観察の仕方も感謝、謝罪表現、その中でも間接発話行為の複雑な仕組みを分析するのに相当役に立つことと思われる。

2. 発話行為(Speech act)

複雑、多様な人間の判断、情緒、意思などの表現素材は、発話という言語的把握の仕方によって、聴者の判断、知覚、動的反応等を刺激する行為として遂行される。このような行為を発話行為(Speech act)という時、これは直接発話行為と間接発話行為の二つに分けて考えることができる。

2-1. 直接発話行為(Direct speech act)

コミュニケーションの遂行において、発話者と聴者との間の発話行為が直線的に行われ、あるスピードが保たれる行為である。まさに回り道を全くとらない行為で、その分直視的、直感的であり、聴者への心的配慮を問題としない限り即応的反応が期待できる。尚、常にその統語形式と発話機能が一致していると言える。例えば、聴者に、

(5) どうもすいませんでした。

と言ったらこれは発話者の、聴者に対する謝罪の念がそのまま直線的に伝わることになり、これを聞いた聴者は発話者の対象条件を引き起こした行為や態度、或は発話者による心理的、物理的被害がある程度忘れられるか、慰められるようになるわけであろう。尚、

(6) どうもありがとうございます。

のような感謝の表現の場合も聴者に起因する恩恵に対して発話者が抱いている感謝の念がありのまま直線的に伝わることになるが、こういう感謝の念はすでに形式に現れているはずである。

ところが、このような直接発話行為の場合はあまりにも即応的反応を予想しているのが普通なので、その分感謝、謝罪の度合いは軽くなるか半減するかになる恐れがあると思われる。或は、その度合いが軽くなるか半減するまでは行かなくてもせめて後述の間接発話行為よりはその度合いが落ちる傾向は確かにあるのではないかと思われる。勿論、このような直接発話行為が伝達という言語の機能から言うならばあっさりしており、明瞭な感じはあるが、発話者の情意の流入という面では多少消極的であり、機械的でもある。

2-2. 間接発話行為(Indirect speech act)

前述したように、間接発話行為は、形式と機能の不一致、つまり文の統語形式と発話機能が釣り合わないところの、文面通りの意味解釈は期待できない行為を指す。感謝、謝罪表現における間接発話行為を観察して見ると、大体、そこには直接発話行為だけでは何か物足りないような、言葉だけでは言い尽くせないような発話者の本当の情意が伺われる。その形式の特徴としてはまず感謝、謝罪の拠り所や対象条件を表面に浮かび上がらせることにより、発話者が如何に聴者に対して感謝、謝罪の念を抱いているかをはっきりと強調するといった形を採っている。そのなので、早速

即座に感謝、謝罪の念を明らかにしてしまう直接発話行為よりは情意的であり、その分表現性という面では優れていると言えよう。

(7) 職人 風呂おけをこしらえるのも私一代で終りだ。大事に使ってくださいよ。
律子 定年祝に奮発したの。今晩、二人で入るわ。 (ちょっといい夫婦)

定年を向かえた夫に念願の桧の風呂をプレゼントしたいと思った律子が職人に頼んでセットが終わったところの場面である。この場面で律子は職人に対して何らの感謝の念を払っていない。実際、律子の発話の形式には感謝の印が全く表れていないが、これは直接発話行為という視覚から見た時の話で、発話機能の面からは立派に感謝の念が伝わっている。つまり、夜遅くまでセットしてくれた職人に「奮発した」という表現を持って感謝の念を表している訳である。それから、今晩夫と二人で入るという約束で職人を喜ばせている。職人としては当然ハードな作業に対する満足感が感じられるであろう。この場合、「奮発した」という表現が即ち後述するつもりの感謝辞になる訳である。これをより分かりやすく補ってみると次のようになるであろう。

(あなたが)定年祝に(ありがたくも)奮発したの。今晩、(あなたの好意をお受けして)二人で入るわ。

このように、実際の言語生活では感謝の念を間接的、迂回的に表現することがいくらでもあるのである。この場合、直接発話行為を使ったなら律子は職人に対してそんなに感心しなかったり、単なる社交辞令を発したことに過ぎなくなるかも知れない。間接発話行為は又感謝、謝罪の度合いが強すぎてとても言葉では言い尽くせないと思われる時にも表出されるようである。

(8) 桂子 ごめんなさい。頭まだ痛いですか?
拓郎 (頭を振って)大丈夫だ。もう何ともない。
桂子 私のせいでこんなことに..... (うなぎ)

頭に怪我をした拓郎に桂子が謝っている場面であるが、この場合桂子は直接拓郎に謝ってはいない。ただ、拓郎が頭に怪我をしたのは自分のせいであるという事実判断を下ろしているのみであるが、要するに、自責の念を持って迂回的に深いお詫びをしている訳である。言うまでもなく桂子の発話の次には謝罪の直接発話行為が続くであろうが、この後続叙述を省くことにより謝罪にその分重きが置かれることになるのではなかろうか。つまり、自分のためにこんなことになって誠にすまないと思っているが、その謝罪の言葉は口から出て来ない、或は、言い尽くせない、という桂子の本当の念が省略によって表されているのではないかと思われる。要するに、間接発話行為としての感謝、謝罪表現の特徴は、その対象条件だけを形式に浮かび上がらせることにより、聴者をして発話者が感謝、謝罪の拠り所をはっきりと把握ないし認識しているとのことを感じさせるという過程を経るところにあると言える。

2-3. 感謝辞、謝罪辞

感謝、謝罪表現に於ける間接発話行為の形式を調べてみると、そこには感謝、謝罪の対象条件とそれを引っくるめている文の形式が見受けられる。聴者に感謝、謝罪の念を伝えるに於ては何か働き掛けたり、働き掛けられたりしたのが当然ある訳であろうが、これが対象条件になるのであり、この対象条件に対して発話者は評価、判断という心理的把握の結果を表出するというのが感謝、謝罪表現の基本的な仕組みであると言えよう。つまり、この評価、判断という心理的把握の結果が統語形式にて文面に表されているのを本稿では感謝辞、謝罪辞と呼んで置きたいと思うのである[3)]。この感謝辞、謝罪辞には恩恵を蒙ったり誤りを犯したりしたことに対する発話者の情

---

3) この感謝辞、謝罪辞の辞は、時枝誠記の「詞・辞論」をそのまま適用した結果である。時枝によると、
「詞は、思想内容を概念的、客体的に表現したものであることによって、それは、言語主体即ち話し手に
対立する客体界を表現し、辞は、専ら話し手それ自体即ち言語主体の種々な立場を表現するもので
ある。」ということになるが、本稿で言う感謝辞、謝罪辞は詞に当たる対象条件を引っくるめて発話者 の立場を表現するものと理解して頂きたい。

意と態度が含まれていることになろうが、感謝、謝罪表現の在り方をより明確にするに於てはこのような設定が相当役に立つのではないかと思われる。ところが、感謝辞、謝罪辞と言っても実際の表現文では様々な形で表れており、それを一目瞭然と把握、整理するのは至難のわざであろう。ここでは一応試しのつもりでできる限りの抽出を試みることにとどまり、これに対する修正は後日を期したい。まず、次の例文を調べてみよう。

(9) 徳子 具合いの悪い人にこういうこといっちゃいけないんだけど、少しお金貸してもらえないかな。来月には必ず返すから。 (カナカナ)

徳子が生活に困り、病気中のお父さんへ訪ねていきお金を貸してくれることを頼んでいる場面であるが、この文では「具合いの悪い人にこういうことという」のところだけが対象条件になる訳で、「～ちゃいけないんだけど」のところが即ち謝罪辞になる訳であろう。お金を貸してくれというのは申し訳ないことであり、特に病気中の人にこんなことを言うのはなおさら申し訳ないことである、という徳子の情意が下線の部分で表されているのである。立派な間接発話行為であると言わざるを得ない。

ところが、謝罪表現には謝罪辞の省かれている例も決して稀ではない。

(10) 桂子 ごめんなさい、頭まだ痛いですか?
拓郎(頭を振って)大丈夫だ。もう何ともない。
桂子 私のせいでこんなことに..... (うなぎ)

上の例では、下線のところに対象条件の設定が置かれており謝罪辞は省かれている。勿論、この対象条件というのもあくまでも桂子の一方的な設定で聴者によっては対象条件と思われない場合だってあり得ることで、そうなると、「いや、別に」「とんでもない」などの答えが返ってくることであろう。とにかく、例文では対象条件に対する判断である謝罪辞が省略されておりこの方がむしろ謝罪の度合いをもっと深めているようである。このような考え方は感謝辞にも当てはめることができよう。

(11) 大島 金は?
マル ア、終わってからで、
大島 先にもらうもんだよ、こういうことは。
マル そう言ってもらうと助かります。 (バウンスkoGALS)

上の例文においても謝罪辞の場合のように下線のないところが対象条件になる訳で、下線のところが感謝辞になる訳である。つまり、この談話では大島が「先にもらうもんだよ、こういうことは。」と言ってくれたことが恩恵を蒙る結果になりマルはこれに対して感謝の念を表すに「てもらうと助かります」という感謝辞を発しているのである。これ又間接発話行為として充分資格がもてると思われる。ところで場合によっては対象条件が文面から消えておりただ感謝辞、謝罪辞だけが残されていることも決して稀ではない。

(12) 岡本 だから何?何で、この街を出てゆくの?
満 ええ、まあ、ホント、お世話になりました。 (傷だらけの天使)

(13) 京子 何か、お母さんも出かけてるって……私、お見舞いに行ってくるわ。
マリイ うん。
京子 ごめんね、マリイ。
マリイ ううん。
京子 この埋め合わせは必ずするから。
マリイ 気にしないで。 (フレンチドレッシング)

上の例文では対象条件が表れていない。つまり、聴者から発話者が何の恩恵を蒙ったのかが

表示されていないのであるが、要するに、結果にだけ視点をおいての感謝表現なのである。結局、

文面にはっきりと現れていると思われる感謝辞、謝罪辞の形式をまとめてみると大体次のようなものがよく使われているようである。

* 助かる型---~てもらうと助かります。そいつは助かる。~てくれると助かるよ。
助かっています。　助かったよ。
* くれる型--~て下すって。~てくれた。~て下さったんですもの。　(以上、感謝辞)
* いただく型----~ていただいたのに。~ていただけませんか。
* てしまう型----~ちゃいまして。　~ちゃって。　~ちまいまして。
* けど型---~~ましたけれども。いけないんだけど。~と思いますけど。　(以上、謝罪辞)

3.下位分類

ある命題をより体系化し、内容をより明らかにするためには、当然、その命題に対する下位分類が

役に立つ。つまり、個別的な個所を詳らかに探ることにより全体像の把握が可能になるのである。

感謝、謝罪表現の間接発話行為の分析においても下位分類が必要となるが、この場合、注意すべきところは形式と機能の両者に存すると思われる因果関係を明らかにすることである。統語形式はいろいろな表現文の姿勢をとっていながら、つまるところは聴者との間で何か働き掛けたり働き掛けられたりした関係を示している感謝、謝罪表現はいくらでもあり、そのような表現文の裏面には確かにそういった関係や作用を働かせる何かがあるに違いない。つまり、発話内行為というものである。

発話内行為とは、発話者が統語形式を持って自分の情意を表出するにあたっての、多分に主体性を持つ中核的要素である。主体性を持っているとはいうものの、これは個別的なものではなく社会的に共通理解を存するものであると言える。共通理解があるからこそ聴者は外面的な統語形式にとらわれることなく、発話者の発話内行為を容易に把握でき、それに沿った反応を示すことが出きると思う。この発話内行為はつまるところは形式と機能を結び付ける媒体の作用を行うものと思われるが、その把握は常に与えられた場面や文脈に負うところが大きい。従って、感謝、謝罪表現の間接発話行為を、下位分類という作業を通じ分析するにおいて、発話内行為は最大の基準になると思われる。

3-1. 感謝表現の下位分類

3-1-1. 恩恵受容型

聴者の好意により発話者が恩恵を蒙ることになったことをわざわざ表すという過程を経て間接的に感謝の情意を示す形式である。つまり、聴者の好意を受容することにより発話者が如何に助かったか、或は、如何に役に立ったかを伝えることにより恩恵を蒙ったことへの喜びを示し、結果的には聴者をしてやり甲斐を感じさせるといった効果が産み出される。

(14) 岡本　だから何?何で、この街を出てゆくの?
満　ええ、まあ、ホンと、世話になりました。　(傷だらけの天使)

(15) 笠森　やあ、修復の専門家も一緒に見ていただけるそうなのでお連れしました。
明智　そいつは助かる。　(D坂の殺人事件)

(16) 律子　いえ、ご一緒できて凄くよかった。おとうさんのお話伺って、わたしなりにいろんなことが判ったし。
林　そうですか。そう言って貰うと。　(エイジアン・ブル)

(17) 桑太郎　そう。はいはい。いやいや、ここはいい。ここはあたしにね、まかせておきなさい。
愛子　じゃ、ごちそうんなります。　(わがうるわしの友)

(18) 大島　金は?
マル　ア、終わってからで、
大島　先にもらうもんだよ、こういうことは。
マル　そう言ってもらうと助かります。　(バウンスkoGALS)

(19) 伊勢　おやじと今日子が心配してた。
布田　金、助かったよ。店売ったんだって。
伊勢　元はといえば、昌志が身体を張って稼いだ金で手にいれた店だ。
(絆−きずな)

上の例文はすべてが文面上は何らの感謝の表現とはなっていない。ただ、その形式としては発話者が助かったとか、お世話になったとか、或はおもてなしを受けるといった心的状態や単純な態度だけを表しているだけである。ところがその発話意図としてはすべてが聴者への感謝の念の伝えを究極的発話意図としている訳であると言える。これは言うまでもなく、感謝の念を直線的に、それも反射的に表す直接発話行為よりは聴者への配慮のこもった発話行為であると言ってよかろう。というのは上のような間接発話行為の場合は聴者の好意による発話者の喜びと、それに対する感謝の情意が結果の様相を帯びた状態で存分に表されているからである。例文(14)は聴者の好意が発話者にとって大いに役立ったことを、聴者には発話者が厄介な者になったという事実を表面に浮かび上がらせて表出している。例文(15)、(16)、(18)、(19)は同じ感謝辞が共通しているが、これは聴者の好意を発話者が受容することにより多いに役に立ったか立つことが予想される事実を結果相という拡張線上に浮彫りにしている訳である。これはちょうど手紙の返事の如く聴者は自分の好意の結果を知覚でき当然やり甲斐を堪能できる一方、発話者の感謝の念を思い知ることになるのであろう。[4]

3-1-2. 誉め称え型

聴者からの好意を誉め称えることにより間接的に感謝の念を伝える間接発話行為である。つまり、

発話者が恩恵を蒙ったことの拠り所を聴者にはっきりと指し示すことを通じ、それによる発話者の喜びと感謝の情意を逆に聴者へ伝えると言った効果が持ち出されるのであろう。すると、これは上述の恩恵受容型よりもっと直感的で双方的であると言えるであろう。なぜなら、恩恵受容型が聴者からの好意に対する発話者の一方的感謝の意の表出であるのに比べ、誉め称え型は感謝の念の表出過程において聴者の好意を誉め称えることにより聴者をしてその喜びの共有に参加できるようなムードを造っているからである。

4) 例文(16)の場合「そう言って貰うと」の次には「助かります」が続くべきでたまたまそれが省略されて いるわけであろう。

(20) 職人 風呂おけをこしらえるのも私一代で終りだ。大事に使ってくださいよ。
律子 定年祝に奮発したの。今晩、二人で入るわ。 (ちょっといい夫婦)

(21) 時子 これだけ素晴らしいものを拵えて下さったんですもの。これは必要ありませんでしたね。 (D坂の殺人事件)

(22) 田坂 嬉しい。洋子さん、あなたは金一にとってとても大事な人、あなたしかこの子を救えない。
洋子 お母さん、私は神様でもなんでもない。ただの女です。 (恋 極道)

(23) エボシ よく帰って来てくれた。すまなかったな。 (もののけ姫)

(24) 安田 優子さん、熱心に聞いて下すって。 (エイジアン・ブル)

(25) 律子 いえ、ご一緒できて凄くよかった。おとうさんのお話伺って、わたしなりにいろんなことが 判ったし。
林 そうですか。そう言って貰うと。 (エイジアン・ブル)

上の例文には、すべて聴者への感謝の念が形式上は現れてない。ただ、与えられた場面における聴者の態度や行為に対する発話者の評価及び判断が示されているのみである。しかし、この発話者の評価や判断というものはすべてが聴者に焦点が当てられており、その中身も聴者が聞いていて決して不愉快ではない、むしろ愉快ややり甲斐を感じさせるものばかりである。例文(20)を見ると、風呂おけの職人が律子の事情を聞いて熱心にそれをセットしてくれたことに対し律子は職人の熱意と真面目さを称賛することを通じ間接的に感謝の念を伝えている訳である。この場合、単純な直接発話行為である「ありがとうございます」などを使うと、職人への心的配慮は半減することになるかも知れない。例文(21)、(23)、(24)、(25)も聴者の好意に焦点を当てることで聴者にやり甲斐を感じさせる過程を通じ間接的に感謝の念を表出しているのである。一方、例文(22)の場合は聴者の好意ではなく存在の大切さに焦点を当ててはいるものの、感謝の念の表出の過程では同じであろう。結果的に、恩恵受

容型はその受容の結果に焦点を当てているのに比べ、誉め称え型はその受容の過程に焦点を当てているということで大体の区別がつくのではないかと思われる。

以上、間接発話行為としての感謝表現を大まかに二つの類型に分けて調べてみたが、勿論、この範疇を越えているものも相当あると思われる。多様で、複雑な言語生活を考えるとそれは当たり前のことで、例えば次のような例もあるのである。

(26) いえ。こちらこそ甘えっぱなしで、長い間、ありがとうございました。いろいろ大変だったでしょう? (青春家族)

(27) 京子 ごめんね、マリイ。
マリイ ううん。
京子 この埋め合わせは必ずするから。
マリイ 気にしないで。 (フレンチドレッシング)

(28) 後で礼を言いたい、客人を案内しなさい。甲六。 (もののけ姫)

例文(26)は、表面上は発話者から聴者への慰めの形式を採ってはいるものの、その機能としては感謝の念を伝えるといった役割を果たしているものと思われる。長い間発話者が聴者に甘えることだけして迷惑をかけた、それによって聴者はいろいろと大変だったであろうという自責の表出により間接的に感謝の念を表している訳であろう。それから(27)は文脈を見てわかる通り京子がマリイに少なからぬ損害を与えたことをはっきりと認識し、それに対する埋め合わせを約束することで恩恵を蒙ったことへの感謝の念を間接的に表している。最後に、(28)は聴者に後程礼を言うことを表明することでやはり感謝の念を表しているのである。

3-2. 謝罪表現の下位分類

3-2-1. 自責型

もともと謝罪という行為は発話者が何か聴者に失礼なこととか、してはいけないこと

とか、或は損害を与えたことなどに対し人間関係の復元や回復の目的で行われることであろう。この一連の過程で専ら発話者にその責任や過ちがあるということをはっきりと自認することで責任所在を明らかにするところに自責型の謝罪表現に於ける根本的なメカニズムがある訳である。

(29) 美佐子　貴方にも関係がある事なんだけどね、服部さんのこと。
拓郎　服部さん?
桂子　いろいろとご面倒をおかけしました。　(うなぎ)

(30) 洋子　ひどいよ、田坂さん。私、いい人だと思ったんだよ。田坂さんのこと。いい人だと思ったのに...
田坂　洋子さん!悪いことした。ワシ、今から生まれ変わってええ人になります。
(恋極楽)

(31) 林　疲れたでしょう。律子さん。無理に引っ張り出して。
律子　いえ.....　(エイジアン.ブルー)

(32) 徳子　具合いの悪い人にこういうこといっちゃいけないんだけど、少しお金貸してもらえないかな。来月には必ず返すから。　(カナカナ)

(33) お豊　よし、じゃ、今夜やるよ。長いことお待たせしましたね、先生。
(鬼平犯科帳)

(34) 律子　一人で行ける。かっこ悪かったらあたし、一緒に行ってあげるわよ。
小倉　子供じゃあるまいし、一人で行けるよ。それより、いい記事書けよ、いい記事。さっきちょっと失礼なことを言ったなあ。　(ちょっといい夫婦)

(35) 女　大丈夫ですか。気分がお悪そうですけど。座りませんか。
哲郎　大丈夫です。座っててください。
女　立ってる方が楽なんですよ。さあ、座ってください。
哲郎　降ります。ご心配かけました。　(絆-きずな)

(36) 布田　ちょっとな。これからもちょくちょくあるよ。でもな、哲、おまえはこんなこと知らなくていい。
おまえ は自分の仕事をやってりゃいいんだ。
伊勢 すなないと思ってる。俺だけが危ないところから身を引いてしまった。
(絆-きずな)

(37) 千鳥チャン？この間はありがとうな。まだ命を救ってもらった礼も言ってなかったよな。
(Kamikaze)

(38) つくし あっ忘れてた。ねえ、総支配人、事務所にお客さんお見えだって、伝言忘れてた、あたし…
(青春家族)

以上の例文はすべてが自責の形式を採っているものと思われるが、こういった形式の謝罪表現は大体謝罪要素の発生過程に於てその拠り所が発話者にあるということを素直に認めるのをその特徴としていると言えよう。素直に認めるということには反省の含意も含まれる訳であるのでこれがそのまま自然と謝罪に繋ることになるのであろう。上の例文を通じて発話者が謝罪の対象条件として問題視するのは次のようである。

(29) 面倒をかけたこと
(30) 悪いことをしたこと
(31) 無理に引っ張り出したこと
(32) 具合いのわるい人にこういうことを言うつもりのこと
(33) 長いこと待たせたこと
(34) さっきちょっと失礼なことを言ったこと
(35) 心配をかけたこと
(36) おれだけが危ないところから身を引いてしまったこと
(37) まだ命を救ってもらった礼も言ってないこと
(38) 伝言を忘れたこと

以上の対象条件を見ても分かる通り、自責型の場合は対象条件がいつも表面化しているということである。というのは自分のせいにするためにはその過程において

常に対象条件を提示しなければならないからである。この対象条件の提示と言っても、一方的に発話者の犯している過ちを事実通り認める形と、後で反省したとのニュアンスを漂わせる形の二つの形式があるようである。例文(29,30,32,33,35)が前者に当たる訳で、例文(31,34,36,37,38)が後者に当たるのであろう。

3-2-2. 事情説明型

謝罪表現を表出する発話時に於てその以前の事情とか背景を説明する形式を通して間接的に謝罪する謝罪表現である。これは形式上はあくまでも事情を説明するにとどまっている訳であるから多少は弁明がましくくどい感じはあるが、日常の言語生活に於ては一般的に使われている謝罪表現なのであろう。要するに、前置きがそのまま謝罪表現としての効果を持ちうることになったと言ってよかろうかと思われる。

(39) つくし　失礼します。あの、ごあいさつが大変遅くなりましたけれども、浅野屋のつくしでございま す。どうぞよろしく。　(青春家族)

(40) 小倉　あ、たばこでしたらどうぞ。
　男　すいません。ちょっと切らしちまいまして。ああ、いただきます。
(ちょっといい夫婦)

(41) 笠森　あなたを疑ったりして、まったく相すまんと思っているのです。きょうは、実はそのお詫びかたがた、事情をよくお話しようと思って、来て頂いたわけですよ。
(D坂の殺人事件)

(42) 小倉　なんだ、いたのか。ハアー遅くなりました。
律子　そういうせりふは、出て行った日に帰って来て言うものよ。家出したのかと思ったわあ。　(ちょっといい夫婦)

(43) 豪　奥様、慰謝料などということではなくてですね、こうして頭を下げておわびしてるんですから。　(わがうるわしの友)

以上の例文から言えることは、大体こういう事情説明型の場合は、当然行うべきことをうっかりして忘れてしまい、後で気ずいたことへの過程説明を通じる謝罪(例文39)、それから聴者に迷惑をかけることになったことへの背景説明(例文40)、または聴者に迷惑をかけたことへの、発話者の持っている心情説明(例文41)、或は結果の認め(例文42)、そして状況説明(例文43)など、いろいろな状況が潜んでいるようである。ただ、これらの例文に共通していると思われるのは謝罪要素の発生に対する発話者の認識に基づく事情なり背景の説明であり、これを通して謝罪の念を間接的に表出しているということであろう。

3-2-3. 言いさし型

聴者に対してあまりにも申し訳ないという情緒を発話者が持っているとき大体言いさしの形式が使われるようであるが、このような形式の特徴はまずだらだらと謝罪要素の発生過程について説明を並べた後肝心の謝罪表現は聴者の想像に任せるといったところにあるかと思われる。つまり、対象条件に対する発話者の評価がはっきりしており、これは申し訳ないことに違いないとか発話者の過ちに違いないとか聴者に少なからぬ損害を与えることに違いないなどという判断の基にこのような言いさし型が表出されるのであろう。言うに言われないといった感じの謝罪表現なのである。その分深さや丁寧さは増すことになろう。

(44) 社員 あのう。
課長 何?
社員 今度、家をひっこすことになって.....
課長 そう。
社員 板橋の方へ。
課長 ああ、そうそう、聞いたね、前に。
社員 ええ。それで、ひっこしの日はやっぱり...... (Aural comprehension)

(45) 桂子 ごめんなさい、頭まだ痛いですか?
拓郎 大丈夫だ。もう何ともない。
桂子 私のせいでこんなことに..... (うなぎ)

(46) 一之 すいません。ちょっとニューヨークの支社に電話.....
一歩 教会からできんの?国際電話だろ?
一之 クルマ。自動車電話。 (青春家族)

(47) 母の声 実は父ちゃんが肝硬変で入院しちまってな、おまえもたいへんだと思うけれど、入院費が..... (愚かもの傷だらけの天使)

(48) 主婦 あら、うちのテレビ、うるさいですか。
学生 え、まあ、昼間はそうでもないんですけどね。夜おそくなると、ちょっと......
(Aural comprehension)

例文(44)はある会社で社員が平日の引っ越しを上司に訴えている場面であるが、いろいろの業務で忙しい会社で平日に席を外して引っ越すということはなかなか難しいと、社員も充分知っている、でも何とかしてでも引っ越しをしなければならない、という認識を基にして許可を求めている訳である。この場合、社員は引っ越しの事実だけを上司に通知しておりそのあとに続くべき謝罪表現は隠しているのである。正確に言うとろくに言えないわけでもある。この過程では発話時に於ける発話者の表情とか音調、それから態度などが大切になり、このような表現の成立に関与することになるのであるが、もし、こういった要素の適用が適切でない場合は意図する表現の充分な表出は失敗するかも知れない。

例文(45)は、3-2-1の自責型の形式を採ってはいるが、途中で言いさしになっているところだけが違っている。つまり、発話者は聴者に与えた迷惑を深刻に受け入れておりそれに対する評価や認識は常識的に見て決まりきっているので口では言えないといった感じの謝罪表現なのであろう。このような把握は他の例文に対しても同じく言えようかと思うが、要するに、言いさし型の特徴と言えるのは対象条件だけを文面に浮かび上がらせておいてその次に続くべき謝罪表現は聴者の判断に任せるというところにあるのではないかと思われる。

4. 結び

以上、感謝、謝罪表現に於ける間接発話行為について映画の台詞を資料として調べて来たが、本稿では主に統語形式と意味機能が全く食い違っていると思われる各種の談話を発話内行為を基準に下位分類を試み、そのメカニズムを明らかにしようとしたのである。つまり、形式としては別の形をとっていながらどうしてそれが感謝、謝罪表現になれるのか、それからその過程で発話者の感謝、謝罪の念を表出できる中心的役割を果たしている要素(本稿ではこれを感謝辞、謝罪辞と呼んでいるが)はどんなものがあるのか、そしてその表出のスタイルを類型化するとどんな結果が得られるのか、最後にその表出の範囲はどこまでなのか、などを考察して来たのである。一口に感謝、謝罪表現と言っても複雑、多様な言語生活を考えるとそこにはいろいろな形式の表現が絡んでいる訳であり、本稿の中で気づいてない形式もまだまだ相当あるかと思われる。とりあえず、これまでの考察の結果を纏めると次のようである。

1. 感謝、謝罪表現の表出に於ては直接発話行為と間接発話行為があり、前者は統語形式と意　味機能が一致しているところの、発話者の聴者への発話行為が直線的に行われ、ある程度の　スピードが保たれる一方、回り道を全くとらないことで直視的、直感的であり、即応的反応が期待できる。ところが、後者の場合は統語形式と意味機能が食い違っているところの、発話者の聴者　への発話行為が迂回的に行われより情意的、感動的であり、聴者を発話者の感じているムード　へ参加できる行為である。

2. 感謝、謝罪表現の表出過程では常にその対象となるべき対象条件がある訳であろかが、この 対象条件とは発話時の以前に発生した、両表現が指向する内容のことで要するに発話者が聴者から恩恵を蒙ったとか、迷惑をかけた結果についての発話者の心理的把握をさすのである。この対象条件に対して発話者は評価、判断した結果を表出するというのが感謝、謝罪表　現の基本的な仕組みになるのであろう。

3. 統語形式と意味機能が一致してない間接発話行為としての感謝、謝罪表現の仕組みを明ら かにするには、その表出過程に於ての発話者の情意、態度を示しているところの感謝辞、謝罪辞の設定が必要であろう。この感謝辞、謝罪辞とは対象条件に対する評価、判断という心理 的把握の結果が統語形式にて文面に反映されているのをさす。

4. 下位分類に当たっては統語形式と意味機能の両者に存すると思われる因果関係を明らかに することに注意しなければならないのであるが、この場合の基準としては発話内行為が当然 必要となる。発話内行為とは、発話者が統語形式を持って自分の情意を表出する際の、多分 に主体性を有する中核的要素である。つまるところは形式と機能を結び付ける媒体の作用を 行うものと言えよう。

5. 発話内行為を基にした文意別に下位分類すると次のようになる。

感謝表現の場合

恩恵受容型--聴者の好意により発話者が恩恵を蒙ることになったことをわざわざ表す。

誉め称え型--聴者の好意を誉め称え、恩恵の拠り所をはっきりと指し示す。

謝罪表現の場合

自責型----- 発話者に責任や過ちがあるということを自認し、責任所在を明らかにする。

事実説明型--発話時に於てその以前の事情とか背景を説明する。

言いさし型---対象条件に対する評価、判断があまりにも申し訳ないとき表出する。

参考文献

水谷 修	『話しことばの表現』	(筑摩書房)	1983
国立国語研究所	『話し言葉の文型(Ⅰ)』	(秀英出版)	1973
国語学会	『国語学大辞典』	(東京堂出版)	1955
日本教育学会	『日本語教育事典』	(大修館書店)	1983
伊藤 克敏	『ことばと人間』	(三省堂)	1986
小泉 保	『言外の言語学-日本語語用論』	(三省堂)	1990
水谷 修	『表現の基礎』	(筑摩書房)	1979
水谷 修	『話し言葉と日本人』	(創拓社)	1963
今井 邦彦	『現代言語学20章』	(大修館書店)	1990

資料

本稿で資料として採った映画の台詞は次のようである。

D坂の殺人事件……薩川 昭夫
絆---きずな……荒井 晴彦
愚か者 傷だらけの天使……阪本 順治
田村 竜
フレンチドレッシング……斎藤 久志
傷だらけの天使……丸山 昇一
うなぎ……富川 元文
天願 大介
今村 昌平
もののけ姫……宮崎 駿
恋 極道……成島 出
バウンス koGALS……原田 真人
KAMIKAZE TAXI……原田 真人
エイジアン・ブルー 浮島丸サコン……山内 久
今井 邦博
カナカナ……大嶋 拓
鬼平犯科帳……野上 竜雄